

## 少子化危機突破タスクフォース（第2期）第1回

1. 日 時 平成25年8月29日（木）17:00～18:00

2. 場 所 中央合同庁舎4号館第4特別会議室

### 3. 出席者

森 まさこ 内閣府特命担当大臣（少子化対策）

（構成員）

渥美 由喜 東レ経営研究所 ダイバーシティ&ワークライフバランス研究部長

安藏 伸治 明治大学政治経済学部教授、日本人口学会会長

後藤 憲子 ベネッセ教育総合研究所 次世代育成研究室室長

齊藤 英和 国立成育医療研究センター母性医療部不妊診療科医長

坂根 正弘 コマツ相談役

鈴木 英敬 三重県知事

宋 美玄 川崎医科大学産婦人科

原田 泳幸 日本マクドナルドホールディングス株式会社CEO

藤井 威 公益社団法人 長寿社会文化協会 代表理事

宮島 香澄 日本テレビ報道解説委員

山田 正人 経済産業省特許庁総務部制度審議室長

（内閣官房）

吉村 泰典 内閣官房参与

### 4. 議事次第

（1）森大臣からの挨拶

（2）吉村内閣官房参与からの挨拶

（3）開催の趣旨等について

（4）少子化危機突破タスクフォース（第1期）での議論と経緯及び少子化危機突破のための緊急対策等について

（5）意見交換

## 5. 議事概要

### (1) 森大臣からの挨拶

- 少子化対策については、これまでさまざまな施策に取り組んできたにもかかわらず、合計特殊出生率は楽観できない状況にある。
- 第1期のタスクフォースは、短い期間ではあったが、皆様方から充実した御議論をいただき、少子化危機突破のための緊急対策が決定された。第2期のタスクフォースは、この緊急対策を具体的な政策にして結果を出していこうという目的のもとに設置した。
- 少子化対策に成功した諸外国にもしっかりと意見をいただいでいこうと思っている。

### (2) 吉村内閣官房参与からの挨拶

- 第1期のタスクフォースに基づく緊急対策に対して、この第2期はプラクティカルな施策をどのように推進していくかという会議である。
- 女性が妊娠、出産、子育てをしながら働けるような環境をつくっていくことが極めて大事だと思う。第2期のタスクフォースは大変貴重な委員会だと思うので、御議論のほどよろしくお願ひしたい。

### (3) 開催の趣旨等について

事務局から資料1と資料2に基づいて、タスクフォース（第2期）の趣旨と、具体的な進め方を説明。

「政策推進チーム」と「情報提供チーム」を開催すること、またチームリーダー及びチームメンバーについて、座長と座長代理に一任するという旨確認。

#### 【山田委員】

議論のフィールドは、6月7日の緊急対策の範囲内におさめてくれということなのか。

#### 【武川政策統括官】

6月の少子化の緊急提言を踏まえるものであるが、まず政府の行っている施策について点検、評価をいただき、足りない分野があれば御提言いただきたいと考えている。

### (4) 少子化危機突破タスクフォース（第1期）での議論と経緯及び少子化危機突破のための緊急対策等について

事務局より、資料3と資料4に基づいてタスクフォース（第1期）の議論と経緯、及び緊急対策について説明。

## (5) 意見交換

### 【渥美委員】

- 子育て支援やワークライフバランスは、大企業では取り組む余裕があるが、中小企業ではそんな余裕がないということがよく言われる。これは間違っていると考えられる。
- 子育てと仕事の両立のしやすさを示す指標として、企業子宝率というものを提唱している。子宝率が2.0以上、海外で言うとスウェーデン並み、フランス並みの企業が福井県内だけで25社ある。小さい企業は人に制度を合わせる。大企業は制度に人を合わせる。私自身も実感しているところだが、大企業よりも中小企業のほうが働きやすい。
- ワークライフバランス、子育て支援、環境というのは、持続可能性が共通するキーワード。未来の子どもたちに持続可能な社会、持続可能な働き方というのは今、本当に心ある地方自治体、企業の方々が熱心に取り組んでいるところ。学んできたことを、ぜひ情報提供したい。

### 【安藏委員】

- 一番新しい合計特殊出生率が1.41ということだが、細かく見ると、35歳以上の女性が子どもを多く産んでいることによって出生率が回復している。特に40歳以上で増えている。子どもを一番産む25～35歳までは全部減っているのだから、40歳以上は不妊治療が入っていると考えると、それによって出生率が上がっている国というのは、ほとんど皆無に近い。
- 子どもを産むという女性たちも減っていくので、少子化対策というのは根本的に力を入れていかないと、私たちが予想している以上の社会的な変化が起きる。
- 子育てできる環境をつくらない限り、（合計特殊出生率は）もう復活できない。今までのままだと、35歳以上で結婚しよう、40歳を過ぎて不妊治療をやろう、それでは遅いということの繰り返しが続くので、この第2期のタスクフォースではしっかりとそこに手を打っていくということを、ぜひ皆さんと協力してやっていきたい。

### 【後藤委員】

- 教育と妊娠・出産、子育て領域に関する調査研究をしてきた。研究所が所属するベネッセは、1977年以降、総社員数のうち女性のほうが男性を上回るということがずっと続いている。管理職の中の女性割合は今年4月で35%という会社。それを生かして妊娠出産分野にも事業を展開してきた。
- 地域の中で声をかけてくれる人、あるいは子ども同士を遊ばせながら立ち話をする人、そういう人が1人もいないと答えたお母さんは増加している。子育ての相談をしたことがある人として、保育士や幼稚園教諭が増加している。地域の中で幼稚

園や保育所の役割は非常に大きくなっている。

- 若い男女双方に妊娠に適切な時期があることを知らせていくことは、子どもを持つ機会を逸失することを防ぐ意味で、とても大事なこと。妊活とか卵子老化に関する情報も最近、雑誌等に非常に出てくるようになってきているが、一過性のブームに終わらせず、若い世代に継続的に情報が浸透するよう官民で取り組めないか。
- 結婚、出産を望む人たちを応援することが第一に必要なことだと思うが、少なくとも生まれた子どもたちが育つ環境をよくするために、教育とか保育の質向上を考えていく必要があるのではないか。

#### 【坂根委員】

- 私どもの会社が近年、出身地である石川回帰を決めた大きな理由は、生活コストの安い地方に雇用の比重を移しておくことで将来の競争力維持ができることと、もう一つが出生率の問題である。コマツの既婚女性の子どもの数は、30歳以上の女性に絞って比較してみると、東京本社が0.7人、大阪と栃木、茨城等の工場が1.2～1.5で日本の平均である。石川は1.9で、石川に管理職の女性が5人いるが、この人たちだけに限定すると2.6人である。
- 少子化対策は地方活性化と切り離せない問題。一般論で日本の少子化がなぜこれだけ加速したかという理由は何と言っても東京一極集中。これが高学歴化を生み、晩婚化を生み、経済的余裕度がなくなってきた。戦後68年経過し東京といえども3世代が結構近くに住む状態になってきていると思うが、この東京一極集中が地方の疲弊を生んできた。また、日本固有の原因として男性中心社会が考えられる。このテーマは地方活性化と女性の活躍促進を裏表で進めない限り、国全体での出生率は上がってこない。

#### 【鈴木委員】

- 三重県でも少子化対策総合推進本部を7月に立ち上げて、26年度予算、来年度予算の重点化施策を少子化対策にしたので、県としてもしっかりやっていくということで頑張っていきたい。
- 大臣のご尽力で社会保障国民会議等で少子化の財源確保の必要性が盛り込まれた。タスクフォースとしてはしっかり大臣を支えて発信をして、少子化の財源を確保していかなければならない。内閣府や厚労省の概算要求も拝見したが少子化の危機を突破するにはまだまだ財源が足りない。
- 先頭を走っていく少子化対策のエンジンとなるタスクフォース第2期となることを期待したい。

### 【宋委員】

- 専門は周産期で、主に胎児診断をしている。大学院で産後6カ月の母親を対象に、産後うつや母子愛着、そして性機能の問題について研究している。
- 子供を産めない人の中には、高齢不妊の問題知識を知らなかったということで妊娠する時期を逃す人と、知っていても産めなかったという人の2パターンいる。知らなかったという人が今後いないように、啓発というのは今後も議論を続けていかなければいけない。現在の学校の性教育が実用的でない。女性誌に限らず雑誌やテレビまたはインターネットというのはとても影響力が大きいので、そういったところに私も含めた専門家が情報提供するのもいい。
- 産科医療の中で産後ケアというのは皆が関心を持ってこなかったもの。出産の前後というのは母親が自己犠牲を払って子どもを育てるのが当たり前であると思われるところがあり、それがやはり2人目、3人目を産むところのハードルになっている人も多いため、家の中まで届く産後のサポートというのが必要。
- 子どもをかわいいと思って育てるには、どうしても両親の心の余裕が必要である。子どもをかわいいと思う余裕があるように、自己犠牲が当たり前であるという風潮をなくしていけたらいい。

### 【原田委員】

- 少子化と経済、これは全てがネガティブスパイラルで動いている。このネガティブスパイラルをポジティブスパイラルに持っていくことの困難さ、ハードルは相当なものであるということを、全てのステークホルダーがしっかりと認識すべき。しかも時間がたてばたつほどネガティブスパイラルが加速されていく。
- 理解と認識を促すというレベルではしっかりとした枠組みができています。次は意識改革。一番大事なことは経営者トップの意識改革。ビジョン、危機感、戦略、ここら辺を中小の経営者も含めてしっかりと教育をする。
- 残業を減らす。ここだけ踏み込んで議論しても経営者トップの意識改革と行動が伴わなければできない。我が社はずっと残業ゼロでやっている。残業の弊害は大きい。婚活の弊害になり、子づくりの弊害にもなっている。経営者のリーダーシップまで踏み込んだ議論に発展することを期待し、私も貢献したい。

### 【藤井委員】

- 2000年まで3年間スウェーデンで大使を務めた。スウェーデンは現在のような世界的に有名な福祉国家を形成するために、30年近い時間をかけた。その過程において少子化対策が充実し、出生率を向上させ、人口問題をほぼ解決し、驚くべきことに中央と地方の格差の是正にまで成功している。福祉国家形成戦略という形で、20年着実に増税して、国や地方公共団体がやりたいことの財源を確保しつつ、それを

やってきた。

- フランスは福祉国家の形成をしつつ、国民に負担を求めつつ、政策によって少子化を克服し、単に出生率が下がっていくのを抑えるだけではなく上昇させた、スウェーデン以上に少子化の克服に成功した国である。中央と地方の地域格差が広がらないような構造政策を行った。
- 人口問題に成功した国の実態をしっかり把握して、そこから日本が何をすべきかということのいわば教訓となること、この政策でフランスやスウェーデンは成功した、というような政策分析をまとめた論文を最近書いた。なぜ成功したのか、なぜ政策がそういう効果を持ったのかに関して、できる限り私が得ている情報を提供したい。

#### 【宮島委員】

- 少子化の議論などに参加させていただくようになってからは6年か7年ぐらいたつが、待機児童で保育所に入れるのが難しいというような、相変わらず大変な問題もある一方で、子どもというのは社会にとっても、経済にとっても大事だという理解については大分変わった。
- 一生結婚しない人の割合が上がっていて、男性の場合、このままいくと下手すれば半分ぐらいの大人は子どもを持たないことになるかもしれないという危機感を感じている。皆が少子化対策を最優先と思っているわけではない中で、子どもに対して関心がない人であっても、子育てをちゃんとバックアップできる、したくなるようなメッセージや政策の進め方をするのはすごく大事。
- 仕事と子育ての現実在即したバックアップ態勢が必要。例えば6～7年前に病児保育の議論があったときには、医療関係の方や保育関係の方から病児保育に反対の意見もかなりあった。。子どもが病気になるのに母親が帰ってこないことはよくないということが理由だった。それはその通りだが、一方企業で働く場においては、責任があつて外せない時があることも事実。現実には難しいことを求めたら、当事者たちは仕事か子どもをあきらめてしまう。実際、今、周りを見ると病気の時の頼りは自分の親など。両親がバックアップしてくれている人としてくれている人の間にはものすごく条件に差がある。祖父母などの助けがない場合でも、国や制度、周囲によって助けられ、両立できる態勢を作ることがすごく大事。

#### 【山田委員】

- 9年前に育児休業を1年間取得した。それ以降、いろんな場で少子化や子育てについてお話をする機会をいただいている。
- 少子化の危機は数値目標と呼ぶのか、ベンチマークと呼ぶのか、ゴールと呼ぶのかは別にして、国家として目指していく道行きというか目標、目指すべきゴールと

いったものはきちんと定めないとならない。そうでないとPDCAサイクルも回らない。

- 検討のフィールドは6月の緊急対策に限られない、とのことなので、すべての国の施策・事業・法律を少子化危機突破の観点からチェックし、足らずがあれば、ツケ出しをしていくことが必要ではないか。
- 残業の話が出たが、先進国で残業について36協定さえ結べば青天井でできるという国も、アメリカを除いたら日本だけ。そういうようなこともしっかりこのメンバーで物を言っていければいい。

**【吉村委員よりメッセージ】（事務局より代読）**

- 「少子化危機突破」という国家的な課題に向けて取り組むことができますことを大変有難く、そして、喜ばしく思っている。
- 山形県においても、出生率向上に向け、結婚支援や待機児童解消等の施策を積極的に展開しているが、このタスクフォースにおきましても、メンバーの皆様とともに、この国家的課題に取り組んでまいり所存である。

**(6) その他**

**【事務局より】**

先ほど座長及び両座長代理に一任いただいた各チームのメンバーが決定したら、9月中をめどに開催する。詳細につきましては追って御連絡する。